

京都造形芸術大学学長 尾池和夫

京都造形芸術大学大学院芸術研究科〔通信教育〕を修了された74名の皆さん、芸術学部通信教育部を卒業された486名の皆さん、おめでとうございます。また深いご理解と心遣いでこの日までご協力を惜しまなかつたご家族の皆さま、さらに熱心に添削指導とスクーリングで、密度の高い指導をしてこられた教員の皆さまに、敬意を払いつつ感謝いたします。ご来賓、学校法人瓜生山学園の役員、京都造形芸術大学の副学長、研究科長、学部長、通信教育部長、センター長、教職員とともに、今日の式典を迎えられた皆さまに、心からお祝いを申し上げます。

「18歳から94歳、藝術と通信する社会人がいる」と、京都造形芸術大学芸術学部通信教育部のウェブサイトの第1ページにあります。皆さんはそのコースを選び、みごとに学部卒業あるいは大学院修了というゴールにたどり着きました。

その喜びを、今、皆さんはかみしめながら、そこに至る人生を振り返っておられることでしょう。さまざまの苦労と工夫、時間のやりくり、制作のための場所と資材の確保、会心の作を完成するまでの試行錯誤、きりがなほの言葉がそこに浮かび上がることと思います。

京都造形芸術大学の通信教育部サイバーキャンパスのウェブサイトには、2004年度以来の、制作者ご本人の掲載許諾が得られた卒業制作作品・卒業研究論文の要約があります。皆さんもぜひそこに作品を残していただくとともに、本学の出身者として後進へのご支援も、よろしく願ひします。

瓜生山学園には一年を通してさまざまの行事があり、それらに参加する市民からも、たいへん好評を頂いていますが、中でもこの卒業・修了展こそ、皆さんのための、皆さんの手による、もっとも華やかな行事であろうと思います。

多くの優れた作品群があり、私はそれらを見て廻ったとき、気がつくど昼食をとってないことも忘れていたほど、感慨深い数時間を過ごしました。人生の数年間をこの作品群に集中して努力を惜しまなかつた結果が、人間館の中にあふれており、その1つひとつが見る人に感動を与えるものである、そのような卒業展でした。

印象に残ったいくつかの作品を紹介したいと思います。

芸術学科では、和の伝統文化コース、塩田紀久代さんの、『山の神行事「ノサカケ」の研究』がありました。この作品は、ご自分が生まれ育つた地域の伝統行事の伝承の姿を辿つたものです。山形県にある「ノサカケ」という行事をテーマに取り上げ、山形県鶴岡市倉沢の「ノサカケ」、同じく鶴岡市戸沢村の「ノサカケ」を現地調査して、フィールドワークから得られた資料をもとに考察した論文です。「ノサカケ」とは、「ノサ」と呼ばれる綱を家族の男性の数だけ編み、さらに供物を入れた綱を編んで、特定の木の手の届くところにある枝に、そのノサを掛けます。その行事は正月に行われるので、一年に一度しか観察する機会がありません。塩田さんはフィールドワークと文献の調査をもとに、このようなノサの形と、行事の特徴とを分類してその結果をまとめて、大作を完成しました。

美術科写真コース、瀧田陽子さんの、『表層』は、縦あるいは横の縞を持つさまざまな対象を撮影して、大量の写真の中から選りすぐった画面を16面にまとめて展示した作品でした。作者が作品の前におられて、その撮影の工夫の様子をくわしく聞くことができました。撮影の対象を探し、出会った対象をどうやって撮影するかを模索し、それぞれ数千枚に及ぶ映した画像の中からどれを選ぶか、それをどのように仕上げるか、さらにそれらをどのように並べるかということ、それらのプロセスがすべて完成して作品となる、その過程のどれもがおろそかにできない、そのような体験を聞くことができました。

デザイン科建築デザインコース、村上由子さんの作品は、『umi to sora to ongaku』です。村上さんの作品は、名古屋市の港に面する地域に、客席から海と空を、大きく開いた窓で、舞台の背景として眺めることのできる場を創設しました。最近はあまり人が集まらなくなった空間を、思い切った発想で、たいへん力強いデザインの空間を創造することによって、たくさんの市民が集まってくる空間に作り直そうとするもので、緻密な表現のパネルと模型でその発想を作品にまとめたものです。

あえて意見を申し上げますが、建築あるいは都市空間の模型には、かならず縮尺と方位を入れてほしいと思います。とくに方位は重要です。日本列島は中緯度にあり、四季折々の豊かな変化がある国です。そこには南からの日射しがあり、大陸からの北風が吹きます。例えば、イギリスの人びとは、南向きの窓は家具が日焼けするので、北向きの方を好むというような違いもあります。このような文化や風土との関係を少し考えてほしいと思いました。

昨年も通信教育部の卒業展をすべて見て廻ったのですが、その時の印象と、今年作品群の印象が、全体としてまったく異なった印象を与えるものであったということに興味を持ちました。それがどういうことを意味するのかはまだわかりませんが、これはまた来年の卒業展を楽しみに待つことにつながり、皆さんの後輩の活躍を期待することにつながりました。

このようにして、毎年、歴史に残る作品が生まれる本学の卒業展であると言えます。作品を生み出した卒業生の皆さんの努力、添削指導とスクーリングでの教員の努力、大量の作品などをやりとりする発送業務の方々、多くの関係者の毎日の努力が、この卒業展にまとめられています。関係の方々にあらためて感謝申し上げます。

昨年、本学人間館の入り口に『藝術立国之碑』が建立され、本学の基本理念がそこに刻まれています。徳山詳直理事長の、芸術の力で世界平和を実現しようという考えを、大学からアジアへ、さらに世界へ発信しようというものです。黒御影石にしっかりと刻まれた碑には、「宇宙の神秘に平伏せ、地球の偉大さに畏れを抱け、生きとし生きる命を愛し尊べ」とあります。

京都造形芸術大学通信教育部で修士の学位を得られた方は現在までに392名、学士の学位を得られた方は、現在までに4800名になりました。その多くの方たちが各地で活躍しておられます。卒業後の人生はさまざまですが、どうかくれぐれも健康を保って、元気に活躍して下さるよう祈っております。

皆さんにはまた、たびたびこの学園を訪れてくださるようお願いします。この後で徳山理事長の歓送の言葉がありますが、皆さんは、それをよく記憶に留めて、藝術立国の理念への理解をさらに深め、それを多くの人びとに、また後輩にも伝えてほしいと思います。藝術立国の理念を、この大学の学風としてしっかりと伝えるのは、今日卒業される皆さんです。そのことを強調して、私の式辞の締めくくりといたします。

修士、あるいは学士の学位を得られた皆さん、まことにおめでとうございます。
ありがとうございました。